

## 〔課題演習報告〕

望ましい対人関係能力を育成するための教育活動の実践的研究  
ー中学校における SEL-8S プログラムの活用を通してー

井 本 泰 子

Hiroko IMOTO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース  
粕屋町立粕屋中学校

(2016 年 1 月 6 日受理)

本研究は、生徒の一人ひとりの対人関係能力と学級適応感を高めるために、社会的能力の育成を目的とした SEL-8S プログラムを実践し、その効果を検討した。研究Ⅰでは、公立中学校の第1学年生徒を対象に、3ヶ月間に5回の授業と3週間の「スキル再強化期間」を実施した。SEL-8S プログラムの実施は社会的能力低群の生徒に効果があることと、社会的能力の高低に関わらず「スキル再強化期間」の効果があることが示された。研究Ⅱでは、公立中学校1校の全学年の生徒を対象に、1年生4回・2年生5回、3年生で10回の授業と「スキル再強化期間」を実施した。検証の結果、学年間で効果に差が見られた。実践校の3年生では、社会的能力が生徒評定・教師評定ともに上昇し、学級適応感(学級満足度及び学校生活意欲)も上昇していたことから、SEL-8S プログラムの効果があることが示された。最後に、効果的な指導の在り方について整理した。

キーワード：社会的能力、学級適応感、SEL-8S、スキル再強化期間

## 問題と目的

知識基盤社会の時代と言われる社会構造の変化の中で、「生きる力」を育むという理念は、ますます重要になってきている。現在どの学校でも学力向上に取り組んでいるが、確かな学力の育成において河村(2010)は、凝集性のある親和的な学級集団作りは、学力向上の必要条件であると述べている。小泉(2015)もまた、学校適応促進モデルを示し、すべての児童生徒を対象にした一次的援助サービスとしての社会的能力の育成が、よりよい人間関係を築き、学校適応の基礎となる重要な取り組みであると述べている。

一方で不登校、いじめ、暴力などの児童生徒を取り巻く問題行動は未だ大きな課題であり、その背景として子どもの社会的能力の不足や欠如が指摘されている。このような子ども達が望ましい人間関係を築く力を身につけるように援助することは、急務の課題である。学習指導要領解説・特別活動編(文部科学省, 2008)や生徒指導提要(文部科学省, 2010)にも社会的スキルに関する記述

が登場し、人間関係形成や社会性に関する技能に特化した指導等の取り組みの必要性が述べられている。

社会性を高める指導のひとつとして、小泉(2011)は、これまでに実践され効果があると報告されている心理教育プログラムを包括するような形でのプログラムとして、「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした社会性(対人関係)に関するスキル、態度、価値観を身に付ける学習」(SEL)の導入と展開を提唱している。SEL-8S (Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School) プログラム(小泉・山田, 2011)は、SELの中での特定プログラムで、学校における対人関係において汎用的で日常の様々な場面で必要となる能力を8つに分類し(表1)、これらをバランス

表1 SEL-8S で育成する社会的能力(小泉, 2011)

基礎的な社会的能力	①自己への気づき
	②他者への気づき
	③自己コントロール
	④対人関係
	⑤責任ある意思決定
応用的な社会的能力	⑥生活上の問題防止スキル
	⑦人生の重要事態に対処するスキル
	⑧積極的・貢献的な奉仕活動

よく児童生徒に習得させることを目的としている。

SEL-8S プログラムの先行実践では、香川・小泉(2007)は継続的・系統的な積み上げが必要であること、宮原・小泉(2009)は学校行事と関連づけて実施することで、プログラムの実施効果があること、学習したスキルや態度の強化・般化のために、学習した内容を日常の教育活動に位置づけ効果的に展開させていくための工夫が必要であることを述べている。プログラムの効果が一時的なものであり実生活への一般化や長期的な維持が見込まれにくいことは、他の多くの実践研究においても指摘されている課題である(江村・岡安, 2003; 藤枝・相川, 2001)。そこで本研究では、「スキル再強化期間」を設定して取り組むことにした。

また、江村・岡安(2003)は、集団的社会スキル教育は必ずしもすべての生徒に有効であるとは言えないと指摘し、子どもの能力の個人差を検討することの必要性を述べている。本研究でも、個人差に注目した研究が必要であると考ええる。

本研究では、「望ましい対人関係能力を身につけた生徒」の姿を、「ある程度誰とでもチームを組むことができ、他者や集団の向上のために主体的に自分の力を発揮しようとする生徒」とする。SEL-8S プログラムの実践が、望ましい対人関係能力を身につけた生徒の育成に効果があるかを、社会的能力と学級適応感の向上から検証し、効果的な教育活動の在り方を追求することを目的とする。

研究Ⅰでは、公立中学校の第1学年を対象に、試行的に SEL-8S プログラムを実践し、プログラム実施とスキルの強化・般化を図るための「スキル再強化期間」の有効性を確認する。研究Ⅱでは、公立中学校1校全学年の生徒を対象に、SEL-8S プログラムを実践し、その有効性を検証する。その際、生徒の社会的能力の個人差も考慮し、初期の能力差からの変容と SEL-8S プログラムのより効果的な活用の在り方についても検討する。

## 研究Ⅰ

**目的** 公立中学校の第1学年を対象に、試行的に SEL-8S プログラムを実践し、プログラム実施とスキルの強化・般化を図るための「スキル再強化期間」の有効性を確認する。

### 方法

- (1) 調査期間：平成26年6月～平成26年12月
- (2) 調査対象：福岡県内の公立A中学校の第1学年6学級の生徒(242名)
- (3) 調査内容

- a. 中学生版社会性と情動(SEL)尺度Ⅱ(試作版) SEL-8S の8つの社会的能力を8因子各5項目計40項目について、4件法(4～1点)で生徒自己評定を求め、因子ごとの得点を対象中学校1学年の平均値・標準偏差から算出される偏差値で示した。
- b. 中学校用規範行動尺度(山田・小泉・中山・宮原, 2013) 規範意識・規範行動を3因子15項目について、4件法(4～1点)で生徒自己評定を求め、因子ごとの得点を複数校の平均値と標準偏差から算出される偏差値で示した。
- c. 中学生版 Q-U 学級満足度尺度(河村, 1994) 生徒の学級生活における満足度を測る尺度。承認得点・被侵害得点の2因子各10項目計20項目について5件法(5～1点)で生徒自己評定を求め、2つの得点を全国平均と比較して4つの群に分類した。
- d. SEL-8S プログラムの取り組みについてのアンケート(教師自己評定)

効果の測定は、a, bは、事前(6月)、事後(11月)、強化後(12月)の3回、cは、事前、強化後の2回、dは強化後の1回実施し、生徒自己評定初期の能力差からの変容を見た。

### (4) 実施の手続き

2014年9月～11月、行事(ふれあい合宿、合唱コンクール、定期考査)と関連づけて、短学活を含む5回の SEL-8S プログラムの授業を実施した(図1)。各授業は、SEL-8S プログラムの中から基礎的社会的能力の育成を目指すユニットを選択した。授業は担任教師のみ、もしくは著者と担任で行った。授業の実施前には2回の職員研修会を実施し、SEL-8S のユニットの体験や模擬授業を行った。また、授業ごとに学年会でのプログラムの提案や、モデル授業を行った。

授業で学んだスキルは、ポスターを掲示し各行事の取り組みの中で活用するように促した。また、学期末の3週間を、これまでに学習したスキルを復習的に強化・般化を図る「スキル再強化期間」

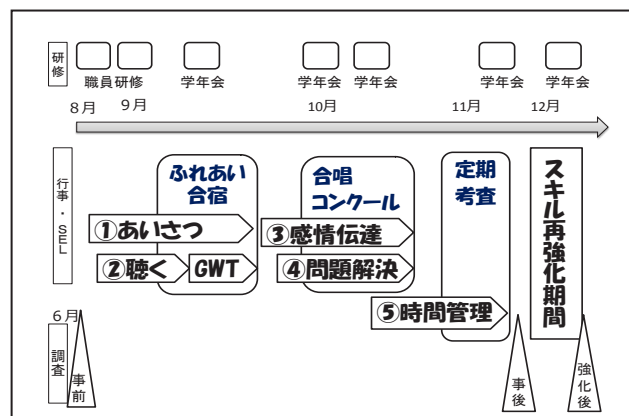


図1 研究Ⅰの手続き

とし、生徒に帰りの会で、スキルの活用について自己評価を行わせた。

### 結果と考察

5回のプログラムが全て実施された5学級で、欠席等でデータに欠損のある生徒を除き、集計を行った。

#### (1) 生徒の社会的能力と規範意識の変容

事前の社会性と情動尺度Ⅱの得点の上位 1/3 を初期高群 (63 人)、下位 1/3 を初期低群 (63 人)、中間位を初期中群 (56 人) とした。初期高低群ごとに、3 回の調査結果を「基礎的社会的能力」「応用的社会的能力」「規範意識」について偏差値を算出し、初期高低群 (高群・中群・低群) × 時期 (事前・事後・強化後) の分散分析を行った。

低群の生徒に有意な社会的な能力と規範意識の向上が見られた (図 2)。これは SEL-8S プログラムを行事と関連づけて実施することで、プログラムの実施効果が社会的能力の自己評価低群に表れやすいこと (宮原・小泉, 2009) を実証するものであった。また、各群の強化後の得点が事後よりも上昇していることから、スキル再強化期間の効果が示された。

#### (2) 学級適応感と、社会的能力および規範意識の自己評価の変容

Q-U 学級生活満足度のプロット図からは、学年全体での学級適応感の高まりは見とれず、行動面での変容にまでは至っていないと考えられる。Elias ら (1999) は、エクササイズの効果が見れるまでには時間がかかると述べており、短期間の実践での生徒の社会的能力の変容は難しいことがわかる。

しかし、「親和的なまとまりのある学級集団 (以下、満足型学級)」へと成長していた 2 学級と、それ以外の 3 学級の間で、初期高低群のそれぞれの生徒の「基礎的な社会的能力」「応用的な社会的能力」「規範意識」の事前と強化後の偏差値の差を比較し、分散分析を行った結果 (図 3)、いずれの項目においても、満足型学級の得点の伸びが大きかった。また、低群の学習効果が大きかった。

#### (3) 教師のかかわり

SEL-8S プログラムの取り組みについてのアンケート結果を、満足型学級の担任 (2 名) とその他の学級の担任 (4 名) とで、項目ごとの平均を比較したところ、満足型学級の担任は、「スキルを活用できている生徒に承認の声をかけた」、「スキルを活用できていない生徒にアドバイスをした」、「自分自身がスキルを意識して生活した」などの得点が高い傾向にあった (図 4)。授業だけでなく、日常生活場面での教師の姿勢についても検討が必要であることがわかった。

## 研究Ⅱ

**目的** 公立中学校 1 校の全学年を対象に、「SEL-8S」プログラムを実践し、生徒の社会的能力及び学級適応感の向上について、その有効性を検証する。

### 方法

(1) 調査期間：平成 27 年 4 月～平成 27 年 12 月

(2) 調査対象：

実践校は、福岡県内の公立 A 中学校の生徒 727 名 (第 1 学年 247 名、2 学年 243 名、3 学年 237 名)、

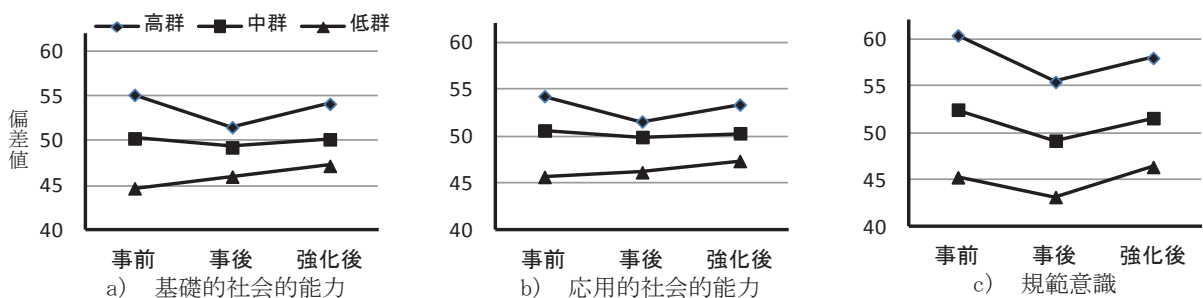


図 2 社会的能力及び規範意識 (生徒評価) の変容

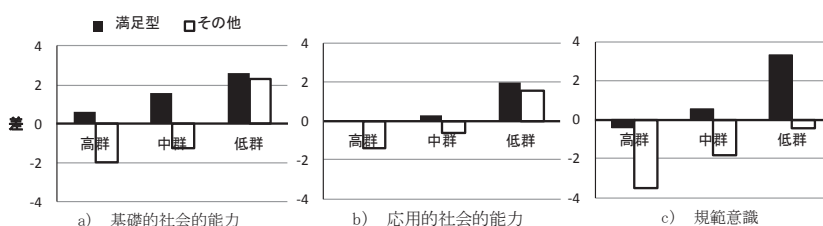


図 3 学級適応感の変化に基づく社会的能力・規範意識の伸び

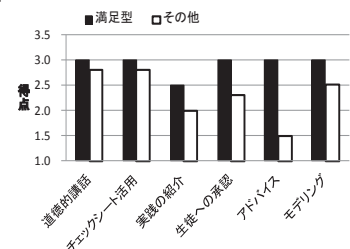


図 4 SEL-8S プログラム実施における教師の関わり



協力校は、福岡県内の公立 B 中学校の生徒 901 名（第 1 学年 322 名、2 学年 285 名、3 学年 294 名）。

### (3) 調査内容

- a. 中学生版社会性と情動（SEL）尺度Ⅱ（米山・小泉，2015） SEL-8S の 8 つの社会的能力を 8 因子各 3 項目計 24 項目について、4 件法（4～1 点）で生徒自己評定を求め、因子ごとの得点を学年毎に標準化された平均値・標準偏差から算出される偏差値で示した。
- b. 「社会性と情動」尺度（教師評定） 中学生版 SEL-8S 能力尺度に従って、生徒の社会性を支える 8 つの能力の測定を学級担任による他者評定によって行った。評定に際しては中学生用尺度の下位尺度ごとの項目を示して評価の基準とし、生徒ごとに各能力について 5 件法（5～1 点）で評定を求めた。
- c. 中学生版 Q-U 学級満足度尺度、学校生活意欲尺度（河村，1994） 学校生活意欲尺度は生徒の学校生活（学級生活）における意欲や充実感を、5 因子各 4 項目計 20 項目について、5 件法（5～1 点）で評定を求めた。
- d. SEL スキル活用度アンケート スキル再強化期間の前後でスキルの活用度について、1・2 年生には「あいさつ」「聴く」の 2 項目、3 年生は「あいさつ」「教え方」「ミニボラ」「断り方」「長所発見」「聴く・伝える」「目標達成」の 7 項目について、4 件法（4～1 点）で自己評定を求めた。

効果の測定は、a, b, c は、事前（6 月）、事後（12 月）の 2 回、d はスキル再強化期間の前後で実施し、生徒自己評定初期の能力差からの変容を見た。

### (4) 実施の手続き

#### ①アンカーポイントの設置

小泉（2015）が示す、学校に効果的に SEL を位置づけるための要素となるアンカーポイント（SEL 導入の基点：学校長の理解とリーダーシップ、学習プログラム、カリキュラムへの位置づけ、推進教員の存在、研修会の実施）に従い実践を進めた。

#### a) 学習プログラム、カリキュラムへの位置づけ

各学年の年間学習プログラムを作成し、学級活動のカリキュラムに 10 回分を位置づけた。年間計画の作成にあたっては、A 校の重点目標である「生徒主体の学校行事の充実」の達成のために、行事でスキルを活用することを想定し、生徒の発達段階と学校行事のねらいを意識してユニットを選択した。1 学期を終えて、「場面設定など、もっと学年の生徒の実態に応じた内容で実施したい」との意見があった。教師の関与性を高めるためにも、夏休みに 2 学期の実践内容を学年毎に 4 ユニット選定してもらい、カリキュラムの見直しを行った（表 2）。

#### b) 推進教員の役割

著者が SEL-8S プログラムの推進教員として「適応促進委員会」のメンバーに加わり、生徒支援加配教員・各学年の教育相談担当者と協同して実践を進めた。推進教員の役割は、指導案・学習プリント・掲示物の準備とその提案及び授業支援、環境作り、研修会の主催等、SEL-8S プログラム実践のコーディネートである。

実践にあたっては、各学年会で SEL-8S プログラムを提案し、初任者など授業の実施に不安のある教師には、個別の打ち合わせや T・T 等の支援も行った。また、授業後には各学年の実践を「適応促進委員会だより」（10 回）で報告し、全職員で実践内容の共有を図るよう努めた。

#### c) 研修会の実施

4 月に全体研修会を行い、前年度の実践報告と今年度の実施内容について 1 年間の見通しを示し、導入の準備を行った。

8 月の全体研修会では、アンケート結果の分析を基にした生徒理解研修および SEL の実践に関する研修を行った。SEL の実践に関する研修は、ワークショップ形式で若手教師によるモデル授業と福岡教育大学の教授による講話（SEL-8S の体験を含む）の 2 部構成で行った。

研修会後の感想（表 3）からは、2 学期の実践への意欲と、SEL-8S プログラムと日常の指導をつなぐことの意識が高まったことが感じられた。

### ②プログラムの実施とスキル・態度・価値観の強化・般化

各学年、年間 10 回のプログラムを準備していた

表 2 3 学年の SEL-8S 年間プログラム（修正版）

月	関連する行事	SEL-8Sプログラムのユニット
4月	学級開き	(A 1) 基本的な生活習慣 「どうぞよろしく」
	選手決め学活	(H 1) 学校でのボランティア 「体育会でのミニボラ」
5月	体育会	(C 5) 意思伝達「上手な教え方」
6月	高校体験入学	(A 5) 基本的な生活習慣 「状況に応じたあいさつ」
7月	薬物乱用防止教室	(F 4) 意思伝達 「薬物、はっきり断ろう」
9月	集中学習会	(G 1) 自己理解「いいところみつ
		け」
10月	合唱コンクール	(C 1) 意思伝達「聴く・伝える」
		(H 3) 学校でのボランティア 「最高学年になって」
11月	進路説明会	(B 2) 進路決定「私が進む道」
12月	三者面談	スキル再強化期間・アンケート
1～3月	高校入試	(E 3) サポート希求 「ストレスマネジメントⅢ」

が、11月末までに実施できたのは、1年生4回、2年生5回、3年生10回であった（表4）。

「スキル再強化期間」は、2学期末に予定していたが、「授業規律強化週間」の取り組みと重複したため、1・2年生は「あいさつ」「聴く」について、授業規律強化週間の中で1週間取り組んだ。3年生は、これまでに学んだ7つのスキルの中から各自が重点目標を設定し、3週間、学年の取り組み「さわやかな3年生になろう」の中で、帰りの会で自己評価・相互評価を行いながら取り組んだ。

### ③効果的な指導方法の整理

生徒の学級適応感を向上させるためには、授業の実施だけでなく、学習内容の定着を図るための指導に継続的に取り組むなど、指導の質の向上が求められる。また、中学校3年間を通して継続的、系統的な指導を行うためには、学級間の効果の差をできる

だけ小さくすることが理想である。そのためには、教科担任制である中学校の指導体制の特徴を生かして、学年や学校全体でチームとして指導することが重要である。

研究Ⅰでは、学級適応感の変化に、学級担任の日常生活場面における生徒との関わりの差が見られた。また、近年若年層教員が増加傾向にある（中央教育審議会、2012）ことから、効果的な指導の要点を整理し、それをモデルに共通実践を行えば、より効果的な指導につながるのではないかと考えた。

そこで、SEL-8S プログラムの指導スキルや実践や日常の生徒との関係性を観察し、Q-U満足型学級の担任教師に共通する指導方法について整理した。

### 結果と考察

実践校A校（19学級）及び協力校B校（25学級）で、欠席等でデータに欠損のある生徒を除き集計を行った。教師評価については、調査時期によって担任が異なる学級等はデータを除外した。

#### (1) 生徒の社会的能力の変容

「基礎的社会的能力」「応用的社会的能力」について、生徒自己評価、教師評価を行った。研究Ⅰと同様に、事前の社会性と情動尺度Ⅱ（生徒自己評価）の得点を基に初期高低群（高群・中群・低群）を設定した。学年毎に、生徒評価は偏差値を、教師評価は5件法での得点を算出し、1回目から2回目の変量について、学校（実践校・協力校）×初期高低群（高群・中群・低群）の分散分析を行った。

1年生は、生徒自己評価と教師評価の「基礎的社会的能力」で、実践校に有意あるいは有意傾向を

表3 研修会の感想

- ・ 1学期は授業だけで終わってしまうことが多く、線をつなぐことができていなかったのが、2学期からはその部分を意識して頑張りたいと思います。
- ・ SELを繰り返し活用していくことの大切さを実感しました。教室に掲示物等を残しながらやっているの、ことあるごとに指し示しながら定着させたいです。
- ・ 2学期にすぐに実践できるモデルを見せていただき、ありがとうございました。今日の研修の中には、生徒と関わって行く上で大切なヒントがたくさんありました。SELの時間はもちろん、日常的に活かして行きたいと思います。
- ・ 基盤は学級づくり。それを学校全体で行っていく大切さを学びました。

表4 SEL-8S プログラムの実施状況

	実施時期	1学年	2学年	3学年
1学期	学級開き	基本的生活習慣 「どうぞよろしく」	実施 基本的生活習慣 「どうぞよろしく」	実施 基本的生活習慣 「どうぞよろしく」
	体育会取り組み	関係づくり 「いろんな意見」	学校でのボランティア 「体育会でのミニボラ」	実施 学校でのボランティア 「体育会でのミニボラ」
				実施 意思伝達 「上手な教えかた」
	3年:高校訪問 2年:親子講演会	時間管理 「時間を大切に」	実施 関係づくり 「顔の見えないコミュニケーション」	実施 基本的生活習慣 「状況に応じたあいさつ」
	薬物乱用防止 教室事後活動	実施 意思伝達 「薬物、はっきり断ろう」	実施 意思伝達 「薬物、はっきり断ろう」	実施 意思伝達 「薬物、はっきり断ろう」
2学期	2学期始業式	実施 基本的生活習慣 「おはようございます」	実施 基本的生活習慣 「おはようございます」	実施 基本的生活習慣 「おはようございます」
	3年:集中学習会 2年:職場体験 1年:ふれあい合宿	意思伝達・関係づくり 「伝える・聴く」	実施 他者理解 「聞く・聴く」	実施 意思伝達・関係づくり 「伝える・聴く」
		時間管理 「時間を大切に」	意思伝達 「冷静に伝える」	実施 自他理解 「いいところみつけ」
	合唱コンクール	実施 意思伝達 「冷静に伝える」	学校でのボランティア 「合唱コンクールでのミニボラ」	実施 学校でのボランティア 「最高学年になって」
	3年;三者面談 2年:修学旅行		規範遵守 「私たちの生徒規則」	実施 進路決定 「私が進む道」

※「実施」は、実際に授業がおこなわれたもの。

示すマイナスの効果が示された。2年生は、生徒自己評定の「基礎的社会的能力」と教師評定の「基礎的社会的能力」高群で、実践校に有意あるいは有意傾向を示すマイナスの効果がみられた。しかし教師評定の「応用的社会的能力」では、低群・中群で実践校に有意にプラスの効果がみられた。3年生は、実践校・協力校の両方で生徒評定・教師評定ともに得点が上昇していたが、実践校でより強いプラス効果がみられた（図5）。

学年毎の効果の差は、学校内における役割の違いやSEL-8Sプログラムの実施状況によるものだと考えられる。実践校の1・2年生で効果が見られなかったのは、授業回数が少なかったこと、行事等との関連が不十分でスキルの日常的な強化が不足していたことが要因であると考えられる。一方3年生は、最上級学年としてのリーダー性が発揮できる取り組みを有効に行っていた。また、7回以上のプログラム実施で学習効果が高くなるという先行研究（小泉，2013）を裏付けるものであった。

## (2) スキル活用度の変容

事前の社会性と情動尺度Ⅱ（生徒自己評定）の初期高低群ごとに、スキルの活用度について、2回の調査結果をスキルごとに評価点の平均を算出し、初期高低群（高群・中群・低群）×時期（事前・事後）の分散分析を行った。

1・2年生は、「あいさつ」「聴く」ともに、初期の群によってスキルの活用度に差はあるが、どの群も事後に得点が上昇していた。1年生では、あいさつ・聴くともに高群、低群が有意に上昇し、2年生ではあいさつで高群の伸びが大きかった（図

6a・b）。

3年生は、初期の高群と低群とでスキルの活用度に差はあるが、いずれのスキルにおいても、各群のスキルの活用度は上昇していた（図6c）。行動観察や自由記述によるSEL-8S学習の感想からも、生徒が学んだスキルを活用していること、スキル活用の効果を感じていることがわかる（表5）。

いずれの学年においても「スキル再強化期間」は、取り組んだスキルの強化を図る上で効果があると言える。しかし、1・2年生では社会的能力には反映されていなかったことから、スキル再強化期間の内容や方法について、もっと幅広く取り組む必要があったと思われる。

## (3) 学級適応感と社会的能力の変容

社会的能力が上昇した3年生（6学級）のQ-U学級満足度尺度の結果を見ると、「満足型学級」が2学級から4学級に増加していた。また、それ以外の2学級を含むすべての学級で、満足群の生徒が増加し、プロット図の変容からも集団の凝集性の高まりが見てとれた。承認得点・被侵害得点の変容について、それぞれ初期高低群期（高群・中群・低群）×時期（事前・事後）の分散分析を行ったところ、承認得点においては低群に、被侵害得点においては低群、中群に有意な効果が見られた（図7）。また、初期高低群のいずれにおいても、満足群の生徒が増えていた（図8）。特に低群の変化が大きかった。以上のことから、学級適応感が高まったと言える。河村(1999)の示す学級適応感にはクラス内での対人関係の測定を重視しており、スクール・モラルとは区別されている。

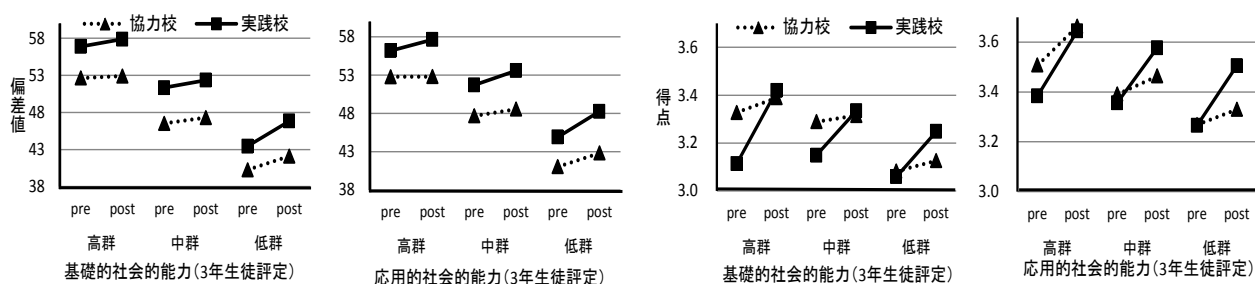


図5 社会的能力の変容（3年生）

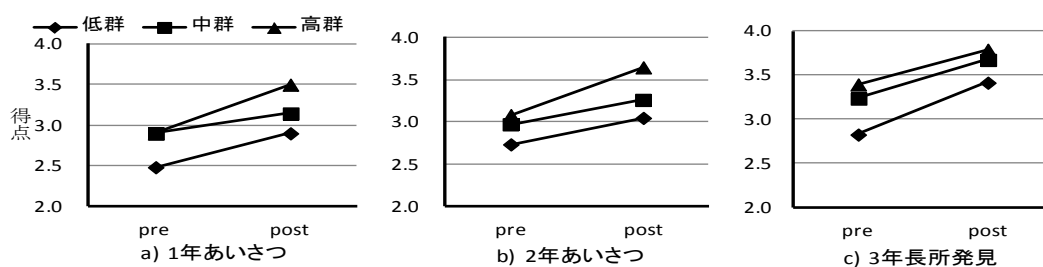


図6 スキル活用度の変容



表5 SEL-8S プログラム学習の感想

- SELのスキルは合言葉があって覚えやすかったし、どれも日常生活で使うものだから意識して頑張ろうと思った。私も周りの人も気持ちよく学校生活を送るのに必要だと思った。
- 毎朝のあいさつで朝から良い気持ちになるし、ミニボラをすることで学校生活がスムーズになった。うさぎとカメのキャッチボールは、お互いにわかり合え友達関係が前よりも良くなった。テスト前に遊びに誘われたときにも、きっぱりと断ることができた。
- スキルを学んだことでいろいろな場面での対処法を知ることができた。それを生活の中でうまく使えるようになった。
- SELのスキルを使うと、友達ともうまくやっていたり、人の役に立つことで、嬉しいことがおこって毎日が楽しくなった。
- ミニボラという誰かのために役に立つことをして、自分も達成感を感じたり気持ちよくなった。ミニボラをする人が増えたので、みんなが協力し合っているやりのある集団に近づいたと思う。

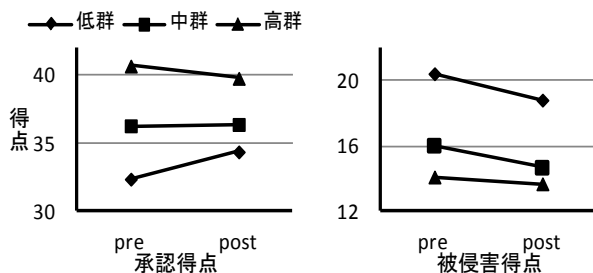


図7 QU 学級満足度尺度の因子得点の変容

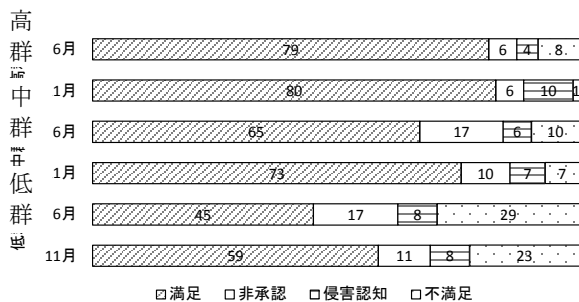


図8 初期社会的能力ごとのQU 所属感の変容

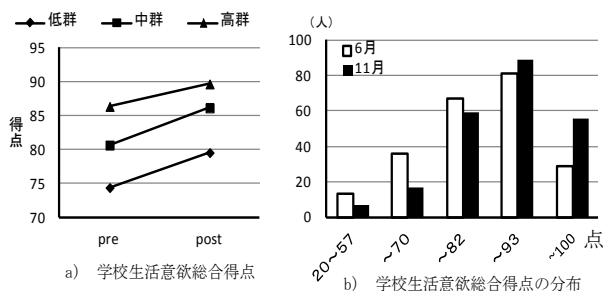


図9 学校生活意欲総合得点の変容

そこで、スクール・モラルを測定した学校生活意欲総合得点の変容についても同様に分析した。結果は、いずれの群において時期の効果がみられた(図9)。これらを総合して、学級適応感が高まったと見ることができる。

1・2年生では、同様の結果は得られなかったことから、社会的能力の向上は、学級適応感の向上につながっていると考えられる。

#### (4) 満足型学級の教師の指導方法

第1回Q-Uで満足型学級の担任7名(1年生3名・2年生2名・3年生2名)とSEL-8Sプログラムで学習効果のあった3学年の教師(8名)について、SEL-8Sプログラムの指導と日常的な生徒との関わりについて、共通事項を次の4点に整理した。

- 生徒への声かけが盛んである。生活ノートでの対話も大切にしている。教師自身の自己開示がある。生徒の行動の承認や価値づけの語りかけが多い。
- 頭ごなしに叱らない。生徒の目線・心情を理解する。しかし、指導は一貫している。Q-U学校生活意欲の領域別でも「教師との関係」は、得点が高い。
- 教師自身がモデルを示し、スキルや手順を確認する、スモールステップで取り組ませる、繰り返し指導するなど、生徒を成功に導くための工夫がある。
- SEL-8Sの学習内容を日常生活につなぐ意識が高く、日常に生かす場面の設定ができている。「ここでこんな力を育てよう」というビジョンがはっきりしている。

#### 総合考察

本研究は、SEL-8Sプログラムの実践が、望ましい対人関係能力を身につけた生徒の育成に効果があるかどうかを、社会的能力と学級適応感の変容から検証し、効果的な教育活動の在り方を追求することを目的としたものである。

生徒評定からみたSEL-8Sプログラムの実践効果は、3年生においてのみ実証された。また、教師評定では、3年生の基礎的社会的能力・応用的社会的能力と2年生の低・中群の応用的社会的能力に効果が見られた。先行研究では、生徒評定に変化が表れないのは、SEL-8Sプログラムを通して生徒の自己評定の基準が厳しくなった可能性があると考えられると報告されており(小泉, 2015)、本研究での2年生の教師評定の向上は、プログラムの実施に一定の効果があったことを示していると捉えることができる。実施回数を増やし、継続的に取り組むことで更に効果が高まることが期待される。また3年生では、社会的能力が高まれば、学校適

応感が高まることが確認できた。

生徒自己評定初期の能力差による効果の差は、いずれの学年においても低群の学習効果が高かった。また、学級適応感の変化も、高群に比べ低群・中群が大きかった。

学年間で効果に差が生じた原因として、実施状況（授業回数、行事等との関連のさせ方、教員の意識）に学年間で差があったことが考えられる。例えば3年生は、推進教員・適応促進委員会の学年担当者と学年主任の連携が強く、SEL-8Sプログラムが1分間スピーチや教えあい学習、掃除マイスター、「さわやかな3年生になろう」等の日常の取り組み等につながられていた。さらに、日々の教育活動の中で、教師が生徒と良好な人間関係を築き、SEL-8Sプログラムのスキル・態度・価値観を意識して自らがモデルを示したり、繰り返しスキルの活用を促したり、生徒の行動を価値づけたりしていることが、満足型学級の教師の共通実践として明らかになった。

以上のことから、SEL-8Sプログラムと日常の教育活動をつなぎ、スキルの活用を価値づけながら継続的に強化していけば、生徒の社会的能力および学級適応感を高める上で有効であることがわかった。

今後、すべての生徒を対象とした一次的援助サービスとして、SEL-8Sプログラムが効果的に活用されるためには、次の4点が重要であることが明らかになった。まず1つ目は、全学級でプログラムが実施できるように、学習環境を整えることである。そのためには、1年生で入学当初のオリエンテーションから基礎的社会的スキルに関する複数のプログラムを教育課程にきちんと位置づけて、丁寧に取り組むことが必要だと考える。

2つ目は、計画がきちんと実施されていくようにマネジメントを行うことである。中学校では、学年主任を中心とした学年チームでの共通理解・共通実践が大きな鍵となる。そこで、推進教員と各学年担当者が、どのように学年主任と連携して実践を進めていくかのマネジメントは大変重要である。

3つ目は、教師がSEL-8Sプログラムを日常の教育活動につなぐ意識を持ち、価値づけていくことである。そのためには、プログラムの内容や時期、行事や日常の指導との関連等を見直し、カリキュラムを修正していくことと、教師自身がスキル・態度・価値観を身につけ活用しながら、生徒との良好な人間関係を築いていくことが必要である。

4つ目は、継続的にスキルの強化を図るために「スキル再強化期間」を位置づけることである。生徒が取り組みの成果や課題を把握し、主体的に

取り組むことができるように、相互評価や中間総括を取り入れたり、ターゲットとするスキルに、学んだスキルを幅広く取り上げることが望ましい。

生徒一人ひとりの対人関係能力を育成し、学校適応を促進することは、生徒達の「生きる力」を育む一助となる重要な取り組みである。今後も中学校3年間を通した継続的な指導を確立すべく、SEL-8Sプログラムの実践に取り組んでいきたい。

## 引用文献

- 中央教育審議会 2012 教員の資質向上特別部会（第11回）配付資料  
 Elias.M.J.他 1999 小泉令三（編訳）社会性と情動の教育-教育者のためのガイドライン 39- 北大路書房  
 江村理奈・岡安孝弘 2003 中学校における集団社会的スキルの実践的研究 教育心理研究, 51, 339-350.  
 藤枝静暁・相川充 2001 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理研究, 49, 371-381.  
 香川雅博・小泉令三 2007 小学生における社会性と情動の学習 (SEL) プログラムの効果 福岡教育大学紀要, 56(4), 63-71.  
 河村茂雄 1999 たのしい学校生活をおくるためのアンケート「Q-U」実施・解釈ハンドブック（中学校編） 図書文化  
 河村茂雄 2010 日本の学級集団と学級経営 図書文化  
 河村茂雄 2012 教師のためのソーシャルスキル 誠心書房  
 小泉令三・山田洋平 2011 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の進め方 中学校編 ミネルヴァ書房  
 小泉令三・山田洋平・箱田裕司・小松佐穂子 2013 心理教育プログラムの実施回数による学習効果差の検討 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 342.  
 小泉令三 2015 一次的援助サービスとしての社会性と情動の学習（ソーシャル・エモーショナル・ラーニング） 日本学校心理士会年報 7, 25-35.  
 宮原紀子・小泉令三 2009 中学校の学校行事と関連づけた社会性と対人関係能力の向上 教育実践研究（福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター）, 17, 143-150.  
 文部科学省 2008 中学校学習指導要領解説・特別活動編  
 文部科学省 2010 生徒指導提要  
 山田洋平・小泉令三・中山和彦・宮原紀子 2013 小中学生用規範行動自己評定尺度の開発と規範行動の発達の変化 教育心理研究 VOL61, P387-397.

## 謝辞

本研究を行うにあたり、研修機会を与えてくださった福岡県教育委員会及び粕屋町教育委員会の方々、心より感謝申し上げます。また、実践校及び協力校の校長先生をはじめ、関係の諸先生方には多大なるご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。